

特集

「統合失調症」再考(Ⅰ)

特集にあたって

飯森真喜雄*

Kraepelin や Bleuler はもとより、Arieti の力動的解釈 (“Interpretation of schizophrenia”) の時代からも離れ、1980 年代から始まった DSM の急速な流布と生物学的研究の進展によって、統合失調症の概念や治療は大きく変化してきた。この間に、Schneider の一級症状が DSM-5 から消えたことにも象徴されるように、観察と記述に基づく統合失調症の重要な症状や用語は脇に押しやられようとしている。

生物学的研究が盛んになる前は、統合失調症は精神病理学のみならず精神医学の高峰であり、精神科医はこぞって言葉によって深い森に分け入り、理解し、解釈しようとしてきた。日本におけるその成果は『分裂病の精神病理 全 16 巻』(東大出版会 1972~1987 年)とそれを発展的に引き継いだ『分裂病の精神病理と治療 全 8 巻』(星和書店 1988~1997 年)とにまとめられている。

その第 1 巻の編集者が土居健郎であったことから窺えるように、そこでは言葉が輝き、言葉を通して統合失調症の内奥に迫ろうとする氣勢に満ちていた。統合失調症は“生きもの”のように多面的に語られ、操作的診断基準のような“標本”ではまだなかった。

しかし、その後はどうであろうか。日本精神病理学会の理事長だった故松本雅彦が最後の著書『日本の精神医学この五〇年』(みすず書房)の中で述べているように、かつて統合失調症は精神科

医を惹きつけてやまない神秘であったが、今やすっかり様変わりしてしまった。その神秘の扉を開き患者理解へと続く道を示そうとした数々の用語(「現実との生ける接触の喪失」や「自明性の喪失」など)や Conrad や中井久夫による発病から回復過程まで俯瞰した壮大な見取り図はもはや“賞味期限”が切れたかのようである。それとともに、生物学的知見の進展には目を見張るものがある。

臨床現場では、統合失調症の減少と軽症化が実感されるようになってきている。さらに近年では、統合失調症か発達障害かと悩み、結局は発達障害に落ち着くケースも急増してきている。治療も非定型抗精神病薬が主流になり、またかつては顧みられなかった認知機能障害とそのリハビリテーションが盛んになってきている。

こうした中、かつての統合失調症はどこに行ってしまったのだろうか? 統合失調症自体が変質してきているのだろうか? それとも、我々の見方が変化してきているだけなのだろうか? あるいは、生物学的知見は旧来の統合失調症像を根本から変えてしまうのだろうか?

そこで、あらためて「統合失調症なるもの」を再考してみることは、過去を振り返り将来を見通すためにも、また臨床を行っていく上でも意義のあることなのではないだろうか。

* いいもりこころの診療所(☎ 113-0024 東京都文京区西片 1-3-18), IIMORI Makio : Iimori Kokoro Clinic, Tokyo, Japan